

平成 26 年度高教研学校図書館部会研修会
第 2 回合同研修会

日時：平成 26 年 12 月 8 日（月）10:00～16:00

（合同研修会 14:00～16:00）

会場：岡山県立倉敷工業高等学校 会議室

1 合同研修会（講演会） 14:00～15:50

講演 学べる・読める学校図書館をつくる
探究学習と読書支援から

清教学園学校図書館リブラリア館長
探究科教諭 片岡則夫

片岡則夫先生は 1987 年に神奈川県立高校の生物の教諭に採用された後、大学院に進まれ、何でも学べる（探究科）という観点から 7 年前より清教学園に勤務されている。清教学園は戦後、キリスト教の信者さんと子どもさんから始まった学校で、和歌山との県境の山間に位置する。図書館では、一番下の本棚に傾斜をつけたり、背あてを入れたりして、背表紙が見えやすい工夫をしている。

学校図書館（リブラリア）では、生徒が何を学びたがっているかを、中学生は総合学習から、高校生は卒業論文づくりから探っている。また、読書支援の実践として、中学一年生に読書の習慣をつけてもらうようにしている。

清教学園は中学 17 クラス・高校 34 クラスで、合計 2,070 名の生徒がいる。職員は専任司書教諭、専任司書、非常勤司書等 2 名で構成されており、カウンターには司書が 2 人常駐するようになっている。蔵書数は 46,599 冊。館内の座席数は 20 席とわずかしかなかったため、総合学習室 48 席を併設した。年間総貸出数も 2006 年から 2012 年まで右肩上がり、中学生の調べ学習の充実が貸出数に結びついたようである。

繰り返し規模を拡大する探究学習を行う中で、それぞれのテーマで中学 3 年生は画用紙一枚分に卒業研究をまとめ、高校 3 年生ではワードを使用して卒業論文を冊子にまとめる。更に、その生徒の作品は、ブッカーをかけて図書館の本棚に入れ、蔵書として保存していつている。

天賦の才能である賜物を生かすために、各段階での問いに対して、何を学びたいのかを繰り返しばつつけていくことが大切である。

中学3年生の卒業研究を見てみると、学習テーマに挙げられた全631種のキーワードの傾向として、4類が29%、5類が23%と割合が高いことが伺える。図書館の回転率も、5類や6類の資料の貸出数が多い。学習テーマの具体的なキーワードとして、睡眠や地震、米、広告、天気などが挙げられる。男女ともに人気のテーマもあれば、はっきり男女差が表れるものもある。中でも、「米」というテーマに男子が意外に多いことが特徴である。時には、コンクリートや段ボールといった変わったテーマを選んだ生徒もいた。特異なテーマの資料については、継続的に活用されない恐れがあると思われがちだが、例えば、コウノトリの本なども数年後に使われたという経緯もあるので、購入して無駄な資料はない。調べ学習は問いから始まる。子どもの知的関心が「なんでも学べる図書館」を育てる。

図書館では、キーワードのランキングの高いところから、購入の優先順位をつけている。具体的なキーワードを集計することで、図書館にどのような分野の資料がどれだけ必要かというデータにもなるため、予算要求の根拠としても使える。

高校生の卒業論文づくりでも、テーマは各自自由であり、今までに300人程がレポートを完成させている。テーマの中には、ジャニーズやボーカロイドなど、一見おちゃらけているような内容に思われるようなものもあるが、それぞれの会社での業務としては至って真剣な仕事であるため、生徒の研究としても何ら問題はない。

まず、自分で方針・テーマを決めて資料を探し、研究企画書をもとに面談を行う。次に、夏休みを中心にフィールドワークを行う。例えば、生徒に代議士の方と面会させ、写真を一緒に撮ってくることで、政治写真の出来上がり方が分かる。同様に、バレエダンサーと直接会い、写真を撮ることで、ダンサーの立ち姿の美しさが伺える。他にも、スーツの持つ機能というテーマで、ラフな服とスーツ姿の自分の写真（首から下）を撮影し、イメージについて街角アンケートを実施するという生徒もいた。このようなフィールドワークが特に大切であるため、いろいろな所に生徒を送り込んで、直接会社の方にお話を聞いて来させるようにしている。その後、ワードによる論文作成に入る。論文は、特に根拠はないが、原稿用紙100枚（40000字）としている。最後に、A4でプリントアウトした論文を製本し、図書館の蔵書として贈呈する。この時、引用と要約の技術も身につける。

今年度の卒業論文では、「なぜオネエ語は誕生したのか」、「100円ショップは生き残ることが出来るのか」、「リアルマネキンが招く」、「宝塚歌劇団の魅力とは何か」、「音楽著作権侵害を解決するには」、「「ノリ」はいかにして生産・消費されるのか」、「学生の序列意識はなくせるのか」などのテーマについて研究された。今年も大手の会社に取材の申し込みをしたり、直接会社を訪問したりして、充実したフィールドワークができたようである。

中学生の読書支援の実践として、何を讀みたがっているかを探るため、中学校入学時に「す

くど文庫」というものを作った。「すくど」とは、この地方の方言で、枯れた松の葉のことを言う。すくどは昔、たきつけに利用されていたのだが、当時、清教塾に集まった子どもたちが、すくどを俵につめて町に売りに行き、学校をつくる資金にした。

すくど文庫は、フィクション（評価の定まった本や生徒のニーズに合わせたおすすめの本）とノンフィクション（多岐にわたる生徒の興味に応える）を易しいものも難しいものも入れ混ぜて選書している。分類別構成は、9類が蔵書数も貸出数（中学一年生）も最も多い。すくど文庫は図書館の中のミニ図書館である。

「おためし読書」として、中学一年生向けに選んだすくど文庫から、更に厳選した本を試し読みする時間を総合学習の授業に設けている。フィクション編では、2冊を7分で約120冊を回覧。一人が50分で約8冊の本を試し読みする。本は名作から柔らかいものまでを選び、黙読の後記録を取る。ノンフィクション編では、3冊を5分で約160冊を回覧。一人が50分で約12冊を試し読みする。ノンフィクションの方がタイトルで分かるので、勝負が早い。こちらも同様に読後の記録を取る。そして、それぞれの本について4段階で評価をし、統計を取り、点数の高かったものからリストアップする。

結果として、フィクション編では、主人公が中高生のものや冒険もの、日本の作家や紙面構成がざっくりした版組の作品（例えば、『カラフル』など）が、ノンフィクション編では、実利的でビジュアルのものや動物もの、楽しい知識・科学もの、肩の凝らない企画などの作品が中学生の心を掴むようである。

読書・探究学習は、生徒の個性・興味・能力の多様性と、図書館の蔵書の多様性の出会いであるため、生徒と蔵書を結ぶ工夫が大切である。

2 講演会 質疑応答 15:50～15:55

3 全体連絡 15:55～16:00

○ 「でーれーBOOKS 2015」 二次投票〆切・・・2015年1月15日

4 閉会

★ 閉会后、「図書委員交流会」について話し合い（希望者のみ）